

ステッピン・イット・アップ

ジョン・ロートン&スティーヴ・ダニング

スティル・ペイン・マイ・デューズ
フィーリングス
バーニング・シップス
ファイアフライ／カム・バック・トゥ・ミー
賢者
アイム・アライヴ
雨に寄せる抒情
ドント・キル・ザ・ファイア
トゥナイト
ビーン・ハート
ショルダー・トゥ・クライ・オン
ワン・モア・ナイト

一口にロック・ヴォーカリストと言っても色々なタイプがいる。イアン・ギランのように巨体にものを言わせてパワーで圧倒するタイプ、イエスのジョン・アンダーソンのようにバンドのアンサンブルの一部に徹するタイプ、ハイトーン・シャウトを売りにするタイプ、ヴォーカルそのものより雰囲気や存在感で魅了するタイプ等、皆それぞれの特徴を強烈にアピールして熱狂的なファンの支持を勝ち得ている。そんな中で、歌の上手さを第一に特徴付けられるヴォーカリストは数少ない。当然だろう。プロなのだから上手くて当たり前。上手い上でのプラスアルファの個性で勝負しなければならないのがプロの厳しい世界だ。それでもなお教えて「歌が上手い」と讃えられる稀有なヴォーカリスト、それが本作の主人公ジョン・ロートンである。

ジョン・ロートンは1946年7月11日、イギリスのニューキャッスルで生まれた。1960年代末にStonewallというバンドと共に当時の西ドイツのハンブルグに渡る。このへんはビートルズを代表とする当時のビートグループのムーヴメントに沿ったものだ。そのハンブルグでロートンはTop Ten Beat Club等に出演するうちにピーター・ヘスラインというドイツ人ギタリストと出会う。ヘスラインは当時ハンブルグ界隈のローカルレーベル“EUROPA”の顔役的存在で、色々なプロジェクトに関わっていた。Electric Food、Pink Mice、そしてルシファーズ・フレンドの前身と言われるGerman BondsとAsterix。そのAsterixにロートンが誘われた訳だ。AsterixはUriah Heepにも通じるハードロック・バンドで、ロートンはTony Cavannaというヴォーカリストとツイン・ヴォーカルを演じている。ラフでワイルドな声のCavannaに対して、ロートンのスムーズなハイトーン・ヴォイスは好対照を成しており、二人が交互に取るリード・ヴォーカルと完璧なハーモニー・パートは彼らの唯一のアルバム“Asterix”を見事に彩っている。

Asterixはヘスラインにとって彼が関わったプロジェクトのone of themに過ぎなかったはずだが、よほどロートンのことを気に入ったらしく、その延長上で1970年にルシファーズ・フレンドとしての1stアルバムを製作する。このアルバムはいかにもジャーマン・ロックらしい屈折した重苦しい雰囲気漂わせたハードロック作品だった。ルシファーズ・フレンドはまるでカメレオンのようなバンドで、その後1976年までの間に4枚のアルバムを発表するが、その作風はめまぐるしく変わった。2nd“Where The Groupies Killed The Blues”では愛拍子の嵐の如きブルグレッツ・ロック、3rd“I'm Just A Rock'n'Roll Singer”では1stに近い「奇妙な味わい」のハードロックに戻ったが、4th“Banquet”では室内楽のようなストリングスとホーン・セクションをフィーチャーしたシンフォニック・ロック、5th“Mind Exploding”では小気味良いブリティッシュ・ハード・ロックと言った具合だ。どのような作風でも無理なく歌いこなしてしまうロートンの歌唱力と表現力には脱帽するしかない。しかし、これらの作品はいずれも商業的に成功したとは言い難く、ルシファーズ・フレンドは時代の変化を先取りしたつもりで実はハズし続けた不運なバンドと言われている。不運と言えば、セカンドアルバム発表後のツアーで彼らはマネージャーに裏切られて金を持ち逃げされ、莫大な借金を背負うとともに、その後のツアーが不可能になってしまう。一般にはこれがルシファーズ・フレンドがその後スタジオ・バンドになった原因と言われているが、実際はそれだけが原因ではなさそうだ。実はロートンとヘスラインは1970年から7年間、もうひとつのバンド、レス・ハンフリーズ・シンガーズ(The Les Humphries Singers、以下LHS)のメンバーとして活動していたからだ。

LHSはコンポージャー兼ピアニストのレス・ハンフリーズを中心に、様々な人種の12人前後のコーラス隊から

Steppin' It Up

John Lawton & Steve Dunning

1. Still paying My Dues (Lawton/Papst)
2. Feelings (Hensley)
3. Burning Ships (Lawton/Hesslein)
4. Firefly/Come Back To Me (Hensley/Kerslake)
5. Wise Man (Hensley)
6. I'm Alive (Lawton)
7. Rain (Hensley)
8. Don't Kill The Fire (Lawton)
9. Tonight (Lawton)
10. Been Hurt (Hensley)
11. Shoulder To Cry On (Dunning)
12. One More Night (Hensley)

構成され、ゴスペルをベースとした明るく楽しいヴォーカル・ナンバーでヨーロッパ中で人気を博したポップ・ヴォーカル・グループだ。ロートンはLHSのリード・ヴォーカリストの一人として、ドイツでナンバーワン・ヒットを記録した最大のヒット曲“Mama Loo”を始め、多くの曲で秀逸なヴォーカルを披露している。このLHSの多作ぶりは半端ではない。7年間で14枚のオリジナル・アルバム、3枚のライヴ・アルバム、14枚のメドレー・アルバムを発表しているのだ。ヒット曲も“Mexico”、“Kansas City”と立て続けに放ってたちまちスターダムにのし上がり、レコーディングと主にヨーロッパを巡るコンサートツアーが彼らの日常となっていく。これではルシファーズ・フレンドどころではなかったはずだ。このように、ロートンの1970年代前半のハイライトは間違いなくLHSだった。

人気に翳が差しはじめたLHSは、1976年に活動を停止する。そこでロートンは当時デヴィッド・バイロンを解雇してヴォーカリストを探していたユーライア・ヒープのオーディションを受け、みごとにその座を手中にする。当然、ルシファーズ・フレンドとも袂を分かつことになった。ユーライア・ヒープでの活躍は皆さんご存知のとおりで、“Fierfly”、“Innocent Victim”、“Fallen Angel”の3枚のアルバムで素晴らしいヴォーカルを聴かせ、ヒープの中興に対する貢献で高い評価を得ている。しかし、よりハードなロックを志向していたロートンは、ますますポップ化するケン・ヘンズリーの音楽性に反発して1979年に次作のレコーディング中にヒープを脱退してしまう。(このときの音源は“Five Miles Sessions”と呼ばれ、マニアの間で珍重されている。一部はヒープの再発CDのボーナスとして出ているが、速やかな全面リリースを願いたい。)

ヒープを脱退したロートンはヘスラインとヨリを戻し、1980年に彼のプロデュースの元、ルシファーズ・フレンドのメンバーをバックに従えて初のソロアルバム

“Heartbeat”を製作する。本作はヘンズリーのポップ化を嫌ってヒープを脱退したことが信じられないようなポップな作品であった。全米ヒットも夢でないような粒揃いの佳曲が並んでおり、ヘスラインのポップセンスの良さを再認識させられるが、商業的に成功を収めることはできなかった。ソロアルバムでの共演をきっかけにロートンはLucifer's Friendに復帰し、アルバム“Mean Machine”を発表する。本作は当時のハードロック回帰の流れに呼応したシンプルで優れたハードロック・アルバムだったが、精力的に行ったクラブツアーの甲斐もなく商業的には惨敗に終わり、ついにバンドは解散してしまう。

1982年にロートンはやはりドイツ人ギタリストのトミー・クラウスとRebelを結成し、アルバム“Stargazer”を発表する。このアルバムもヒープのハードな側面を継承しつつ、クールなポップセンスをミックスした優れた作品だったが、大きな話題になることもなく忘れ去られてしまった。なお、同年“Mexico”のリバイバルヒットを切っ掛けにLHSが一時オランダで再結成され、1枚のシングルを発表している。

Asterix以来コンスタントな活動を続けてきたロートンだが、なぜかここで足跡が途切れてしまう。80年代に何をしていたのかは、ロートンが来日した暁に直接本人に聞いてみたい。

次にロートンの名前を聞いたのは1990年のZAR(ツアー)であった。ZARはRebelでの相棒だったトミー・クラウスが結成したメロディック・メタル・バンドであり、1stアルバムの製作にあたってヴォーカリストを探しあぐねた末に、昔共演したロートンに白羽の矢が立ったのであった。ZARの1stアルバム“Live Your Life Forever”は、ロートンが以前にも増して気合のこもったハイトーン・ヴォーカルを聴かせており、非常に優れたメロディック・メタル作品に仕上がっている。今年(2002年)になってRebelの“Stargazer”と2in1でCD化されたので是非聞いてほしい。しかし、この一作でロートンはZARを脱退してしまう。当時ロートンはイギリスに住んでおり、ZARのレコーディングやライヴのたびにドイツとの間を行き来していたために疲労してしまっことと、セカンド・アルバムのコンセプトにロートンのヴォーカル・スタイルが合わなかったことが理由と言われている。彼らが決して喧嘩別れた訳ではない事は、ZARの3rdアルバムの1曲“Eagle's Flight”にロートンが参加し、トミーとデュエットしていることから明らかである。

1992年にはLHSが再結成され、1枚のアルバムをレコーディングするとともにドイツ、オランダなどをツアーして回っている。このアルバムは“Spirit Of Freedom”等のタイトルでヨーロッパ各国で様々な形で発売されており、十数種類ものCDが出回っている。ロートンは“Mama Loo”の再録音で変らぬ美声を聞かせている。なお、この再結成後、ロートンと一部のメンバーがDC Lawというプロジェクトを立ち上げかけたが、結局何も残さずに終わったらしい。

1994年、何と再びピーター・ヘスラインと組んでその名もルシファーズ・フレンドⅡと称してアルバム“Sumogrip”を製作する。本作はAOR志向の強いメロディック・ハードロック・アルバムであり、10年に一度の大傑作との評価を得て、日本の某輸入盤店では1994年度の売り上げNo.1の栄冠に輝いたとのことだ。タイトルといい、若乃花

の写真を使用したジャケットといい、明らかに日本を意識していると思われるが、残念ながら国内盤の発売には至らなかった。琴による純日本風のイントロに続いて畳み掛けるように炸裂する“Heartbreaker”、“One Way Ticket To Hell”のカッコよさは文句の付けようがない。個人的にはロートンの最高傑作と思っているので、ハードロック・ファンなら是非一度聴いてほしい。

1995年には自身のバンドGunhillを結成し、様々なアーティストのカバー集“One Over The Eight”を自主制作カセットでリリースする。さらに1997年には2ndアルバム“Nighthead”を発表。このアルバムにはロートン作の“Don't Stop Believing”とメンバー作のもう1曲が収録されているが、大半がカバー曲で占められている。Gunhillは渋いロックを聞かせる大人のバンドとしての実力は十分と思われるが、オリジナル曲が少なく、コンポーザーの不在に泣いたバンドと言える。思えばロートンは優れたコンポーザーと出会ったときに輝きを増している。ピーター・ヘスライン然り、レス・ハンフリーズ然り、ケン・ヘンズレー然りである。そのヘンズレーと2000年5月にロンドンで開催されたユーライア・ヒーブのファン集いHeepvention 2000において競演したことを切っ掛けにHensley Lawton Bandが結成される。2001年春にはHeepventionでのライブの様相が“The Return”と題してCD化され、さらに同年5月にはハンブルグでオーケストラを従えた“Salisbury”の演奏をメインとしたコンサートを行うのだが、バンドはその直後に分裂。現在は自身のバンド、John Lawton Bandで活動を続けて現在に至っている。なお、2000年には自身2枚目のソロアルバム“Still Payn' My Dues...”を発表。ブルージーで適度にポップな心地よいヴォーカルを聞かせ、今なおその健在振りアピールしている。

今貴方が手にしているCD“Steppin' It Up”は、ジョン・ロートンがユーライア・ヒーブのキーボード奏者であるフィル・ランゾンのサポートを受けて、現在のJohn Lawton Bandのベーシスト、スティヴ・ダニングとのコラボレーションにより製作したアンブラグド・アルバムである。スティヴ・ダニングはこれまでの15年のキャリアの中でMisha Calvin,Tony Martin (ex.Black Sabbath), Dougie White (ex. Ritchie Blackmore's Rainbow)を始めとする多数のアーティストのサポートを勤めてきた実績を持ち、巧みな5弦ベース・ブレイのみならずギターもかなりの腕前という有能なミュージシャンだ。昨年(2001年)12月に行われた“The Magician's Birthday Party”でロートンとダニングの二人が即興で披露したアコースティック・ギグが好評を博したため、本作の製作の企画が持ち上がったとのことだ。本作の内容については本稿執筆時点で未聴のため、出典を中心に曲目を解説しよう。

Still paying My Dues (Lawton/Papst)

(Phil Lanzon on keyboards)

ロートンの2枚目のソロアルバムのタイトル曲。オリジナルはZZトップを思わせるようなハード・ブギー・スタイルの演奏だったが、フィル・ランゾンのキーボードをからめてどのように仕上げるのだろうか。

Feelings (Hensley) (Phil Lanzon on keyboards)

お蔵入りになった“Five Miles Sessions”でレコーディングされた曲。後にロートンの後任ヴォーカリストのジョン・スローマンが歌ったバージョンがロートン脱退後のヒーブの最初のアルバム“Conquest”に収録された。ロートンのバージョンは1996年に発売されたヒーブの4CD Box-set“*A Time Of Revelation*”で初めて日の目を見た。

Burning Ships (Lawton/Hesslein)

ルシファーズ・フレンドの2ndアルバム“Where The Groupies Killed The Blues”に収録。元々がアコースティック・ナンバーだけにどんなアプローチで演奏されるのが楽しみである。

Firefly/Come Back To Me (Hensley/Kerslake)

(Steve Simmons , sax)

“Firefly”はロートン初参加のヒーブの同名アルバムのクロージングを飾るタイトル曲。オリジナルはロートンとケン・ヘンズレーがリード・ヴォーカルを分け合っているが、お気に入りの曲らしく、近年のGunhillやJohn Lawton Bandのライブでも取り上げている。“Come Back To Me”はロートン参加3作めのヒーブのアルバム“Fallen Angel”収録の秀逸なバラード曲。ここでも情感たっぷりに歌い上げているに違いない。

Wise Man (Hensley)

ヒーブのアルバム“Firefly”収録のバラード。心にしみる美しいメロディーとロートンの入魂の歌唱が涙腺を直撃するキラー・ナンバーだったが、さてここではどんな解釈の演奏を聞かせてくれるのだろうか。

I'm Alive (Lawton) (Steve Simmons, on sax)

ヒーブの“Fallen Angel”収録。ポップ化が進むケン・ヘンズレーに対してロッカーとしての心意気を示したロートン作のハードロック・ナンバー。しかし、本アルバムのリハーサルに立ち会った人によると「物議をかもし演奏」だったそう。スロー・バラードに変身していたりするのだろうか。

Rain (Hensley) (Erol Sora guitar solo)

ヒーブの5thアルバム“The Magician's Birthday”収録のアコースティック・バラード。オリジナルはデイヴィッド・パイロンが歌ったが、ケン・ヘンズレーも自身のソロ・アルバムで歌っている。最近では“Hensley Lawton Band”のライブでも取り上げられている。

Don't Kill The Fire (Lawton)

このアルバムのためにロートンが書き下ろした新作。

Tonight (Lawton) (Erol Sora on guitar)

これもお蔵入りした“Five Miles Sessions”でレコーディングされた曲。オリジナルは軽快なロック・ナンバーだったが、ロートンのソロアルバム“Still Payin' My Dues”でスロー・アコースティック・バラードとしてカバーされた。

Been Hurt (Hensley) (Steve Simmons,on sax)

続いてこれもお蔵入りした“Five Miles Sessions”でレコーディングされたブギー・シャッフル・ナンバー。オフィシャルには、ロートン脱退後のユーライア・ヒーブのアルバム“Conquest”のセッションでジョン・スローマンが歌ったバージョンがシングル“Carry On”のB面として発表された。ロートンのバージョンはロートン時代のヒーブ三部作がESSENTIALからリマスターCDで再発売されたときに“Fallen Angel”のボーナス・トラックとして初めて日の目を見た。

Shoulder To Cry On (Dunning)

(Phil Lanzon ,keyboards)

本作でロートンの相棒を務めるSteve Dunningの曲。

One More Night (Hensley)

(Phil Lanzon on boogie piano)

ヒーブの“Fallen Angel”収録の思いっきりポップなブギー・シャッフル・ナンバー。本作でもフィル・ランゾンがブギー・ピアノを披露しているとのことなので、同じようなスタイルで演奏しているのだろう。

ジョン・ロートンの魅力はどこから来るのだろうか。ロートンにはよく元レインボーのロニー・ジェイムズ・ディオやスコピオンズのクラウス・マイネと比較される。確かにこの3人の声はよく似ているが、ディオの悪魔術があったようなおどろおどろしいアクの強い声に対して、ロートンの声は変な癖がなく実にスムーズでストレートな洗練された声だ。また、マイネの少し線の細い印象の声に対して、高音域まで音色がやせ細ることのない逞しい声質がロートンの最大の資質と言えるだろう。声そのものが実に「気持ち良い声」なのだ。しかも感情表現が豊かで、澁刺としたバイタリティあふれる爽快なロック・ナンバーから泣きのバラードまで自在に歌いこなすのだ。若いころは声質のスムーズさから印象が軽すぎるくらいがあったが、年輪を重ねるにつれてさすがにハイ

トーンの冴えは薄れたものの、全体に冴みが加わって味わい深い声に変わってきている。今やそれがまた彼のたまらない魅力なのだ。

果たしてロートンはその実力にふさわしい成功を収めたと言えるだろうか。確かに70年代はLHSとユーライア・ヒーブというビッグネームの一員として華やかな時期を過ごした。しかし、ヒーブとの決別後は運にも見放され、凋落と失意の80年代を過ごしたことだろう。そのような紆余曲折の中で、運命の分かれ道はいくつかあったように思う。1971年の末には、Deep Purpleのリッチー・ブラックモアが“Fireball”の売れ行き不振に嫌気がさして、同僚のイアン・ペイスやシン・リジィのフィル・ライノットを誘ってBaby Faceというバンドの結成を企て、ヴォーカリストとしてロートンに声を掛けたという。ロートンも結構乗り気だったらしいが、結局はリッチーがフィルのペースに満足できず、このプロジェクトは立ち消えになったらしい。その後、Deep Purpleをやめたリッチーがディオをレインボーのヴォーカルに抜擢したのも、ロートンの幻影を追っての行動かもしれない(当時LHSは大変なビッグネームでロートンの引き抜きは不可能だったはず)。もしリッチーとのコラボレーションが実現していれば、ロートンの運命も違っていただろう。

しかし混迷の80年代を乗り越えたロートンは、90年代に入って等身大の活動を楽しんでいるように思える。近年のロートンは、95年にはバーニー・ショウの代役として一時ヒーブのツアーでヴォーカリストを勤めたり、Heepventionや今年の“The Magician's Birthday Party”といったヒーブのファン集いに参加したりと、ヒーブ人脈の中で生き生きとした活動を見せてくれている。好きな音楽を心の赴くまま演奏し、ファンと親しく交流する。それがミュージシャンとしての理想の姿ともいえるのではないだろうか。願わくは彼の作品が国内盤で発売され、われわれ日本のファンとも親しく接する機会が増してほしいものだ。

一時期は不運だった。しかし今では世界一幸せなヴォーカリストがここにいる。

2002.5.29 MIZ

(<http://www.5a.biglobe.ne.jp/~miz/lhs/index.html>)

URIAH HEED道 2002 Live!

At 恵比寿Guilty on July 21st (Sunday),2002

STEERFORTH

(The Japanese cover band of Uriah Heep)

special guests

John Lawton & Steve Dunning

詳細はこちら MOONSHINE DREAMER'S WORLD <http://www1.odn.ne.jp/~cam83420/>

刈り掘る庭ジャム <http://www.geocities.co.jp/MusicStar/1235/>